

## 作家論

### 小津監督を支えた人々小川くみ子さんのこと（上）

衣斐弘行 同人誌主宰

小川くみ子さんは小津安二郎が亡くなるまでの六年ほどを住み込み家政婦として生活を共にし、小津母子が信頼を寄せていた人である。

小川さんのことを私はこれまで「火涼」31号（1993年10月）、45号（2000年3月）にそれぞれ「聞き書き 小津安二郎」、小説「谷戸の譚」として書いてきた。これらは藤田明氏が高書『平野の思想く小津安二郎私論』（2010年ワイズ出版）に紹介してもらっている。そしてこれを読んだ朝日新聞本社文化部の斎藤博美記者が首都圏版に「小津安二郎がいた時代」という連載欄に小川さんのことを聞きたいと取材に来たのは2014年5月のこと。その記事の掲載は7月6日付朝刊で、この欄は関東圏内に限られたものであったが小津監督に纏わる話だけに反響が多かったようで実際私への問い合わせも幾人かあった。

私が小川さんと初めて会ったのは1975年5月のことだから既に46年も前のことになる。それ故、取材を受け

たときこれまで書いてきた内容はすっかり忘れてしまっていた。しかし小川さんのことはずっと忘れずにいたので新聞を読んだ人から或いは何か小川さんについての情報が得られれば、という期待を持った。先述の如く掲載後反響はあったが小川さんに関する情報は皆無であった。

以前、都築政昭氏の『小津安二郎日記』（1993年講談社）に小川さんに取材した箇所が少し書かれていたので消息を問合わせたことがあったが氏も分からないということであった。小川さんの郷里が「富士見」という村だと私に話していたことがありそれが何処の「富士見」なのか聞かずじまいにいた。それが新聞を読んだといつて松阪から小津の足跡を調べている秋山昌弘さんという青年が訪ねてきてその郷里のことを教えてくれた。秋山さんの話では脚本家野田高悟の『蓼科日記抄』という本の中に、「小川くみ子の出身地は長野県諏訪郡富士見町」と書かれているのと。松阪には秋山さんのように首都圏版の小津に関する記事にまで目を通し丹念に調べている熱心な人がおられることに驚いた。しかも秋山さんはその後の小川さんのことを知りたいという私の思いを察し私宛の手紙の住所（東京都渋谷区神宮前1・19・9）を手掛かりに探索に上京。結果は成果を得ることはなかったが私は秋山さんの熱意に感

謝した。この小川さんの郷里の話を書いた記者にも知らせたが掲載紙は山梨県と長野県の極一部には入るそうだが富士見町あたりには入らないので期待していた情報が得られなかったことを私に詫びた。

今回この小川くみ子さんとの出会いから書いておきたいが小川さんが小津に貰った品々を出来る限り都度紹介したい。

1973年、私は臨済宗の禅修行道場である北鎌倉駅前にある円覚寺の僧堂に入門した。臨済宗の修行道場は全国に30余ヶ所あるがこの道場を選んだ理由は嘗て亡き父がこの道場で修業したということを知っていたからであった。その当時の父の修行仲間であった円覚寺管長の朝比奈宗源老師が道場の師家で、更に、円覚寺門前南川の鎌倉街道沿いにある浄智寺の住職でもあった。小津が晩年を母あさゑと過ごした家はこの浄智寺境内の一角にあり朝比奈老師とも浅からぬ縁があった。小津が眠る円覚寺のスクリーンを模った墓石に彫られた「無」の字は小津から老師が直接頼まれたものだが墓石の字は建立に際し新たに書いたもの。また母あさゑと小津自身の葬儀も当然だが老師が導師の許浄智寺で行われた。因みに小津家の菩提寺は深川の同じ臨済宗で妙心寺派の陽岳寺でそこに父寅之助母あさゑは眠っ

ている。

道場に入門して二年目から三年目にかけて私はこの朝比奈老師の世話係である隠侍という役に就いた。隠侍の日課は他の雲水と共に座禅、作務、托鉢、参禅を行い、その合間に老師の食事から身の回りの世話から来客への対応と身心ともに休まる時間がなく大変であった。このような日々のなかでしばしば老師が夕方近くになると円覚寺の隠寮から自坊の浄智寺に行くことがあった。私はその伴僧として浄智寺に行き、老師が帰るまでの時間を寺の典座と呼ばれる台所で待つ。この間が安息を得る唯一の時間であった。当時朝日奈老師は84歳という高齢であったが比較的矍鑠としていてしっかりした足取りで浄智寺までを行き来した。

その浄智寺の台所で小川さんは私が待つ間洗い物や風呂を沸かしたりしていた。小川さんが浄智寺に住み込み家政婦としていつから来ているのかは聞いていないが、いつか老師の話では小津家に居た頃から時々使いで寺に来ていて顔馴染みで気心が分かっていた、とのことであった。私が出た頃の浄智寺の小川さんは50代半ばであったから小津家に居た頃は恐らく30代から40代初めであったのだろう。口数の少ないおっとりとした小川さんは控えめで物腰の柔ら

かい人であった。強いていえば乙羽信子に似ていなくもな  
いかな、という気がした。小川さんと出会ってから暫くは  
小川さんにお茶を出してもらっても挨拶を交わす程度で話  
をするとはなかった。雲水は無駄口を叩くな、という道  
場の戒めが身についていた為でもあった。しかし、小川さ  
んはしばしば会っている間に私が三重県から来た雲水であ  
ることを知り、ある日、「あなたのお寺から松坂は近いです  
か」と訊ね、「わたしは行ったことがないのですが小津先生  
からよく松坂の話をお聞きしたので」といった。このこと  
からかつて小川さんが小津宅で住み込み家政婦として働い  
ていたことを知った。こうしたことがきっかけになり老師  
を待つ間小川さんから小津家当時の思い出話を聞きそれが  
ひそかな楽しみともなった。

小川さんは小津を語るのに必ず「小津先生」と呼び尊敬  
の念をもって話した。そういえば小津の日記で田中真澄編  
纂の『全日記 小津安二郎』(1993年フィルムアート社)  
中にはたびたび小川さんの名が出てくるが最期がンセンタ  
ーへ入院する記述までは「小川さん」と全て「さん」付で  
記されていて小津の小川さんに対する思いの程も感じられ  
る。

小川さんが小津家に行くようになったのは笠智衆のたつ

ての頼みであった、という。小津母子が晩年を過ごした浄  
智寺谷戸の家は手掘りの短い隧道を抜けたところにあり日  
本画家小倉遊亀の家の向かい側にあった。以前は伊東深水  
の画屋でもあったという小津の家だが家政婦仲間のあいだ  
では気難しい人として知られ、日常生活に厳しい母親のい  
る「小津先生」宅への行き手はあまりなかったそうだ。た  
まに映画好きだという家政婦が興味本位で行くが水の便は  
悪くプロパンガスは危ないからと炭火で炊事をしなくては  
ならず帰宅の遅い小津を寝ずに待つ母より先に休むわけに  
はいかず直に音を上げて辞めてしまう有様が続いた。

小川さんと笠智衆の出会いには木下恵介の甥が撮影所で大  
火傷を負い大船病院へ入院したときその付き添いに小川さ  
んが派遣されていた。その介護の様子を見舞いに来た笠智  
衆が二三度見ているその人柄や態度にほれ込んだ笠が、「あ  
んななら、きつと勤まるからどうか一か月でもいいので小  
津先生のところへ行ってくれないだろうか」と再三にわた  
り懇願した。小川さんは実直な笠の口説きに折れて承知を  
した。小津家での生活はこうした縁ではじまった。一介の  
雲水で修業の身であったがそこで小川さんから聞いた貴重  
な「小津先生」に纏わる思い出話を道場に戻ってからメモ  
帖に認めた。隠侍の役職は狭いが部屋があてがわれていた

のでその点幸いであった。そして、小川さんは「小津先生」から戴いたといういろんなものを東京の自宅に帰るたびに持ってきて、「あなたのほうがこれから大切にしてくれると思いますから」といって私に手渡した。それらは「小津先生」との思い出が多く詰まった品々であつたらうにと一度は断つたが、「これからさきわたしもどうなるかわからないし是非そうして下さい」といって微笑んだ。そのときの小川さんの顔を今も忘れることができない。

今回、紹介した小津の抹茶茶碗の「素描画」（「写真」縦25cm横33cm）は小川さんが小津宅に行つて3年目くらいの時にはじめて「こんなものだが：よければ」といって手渡されたもので1960年頃のもの。左下の「安」朱印は書いたもので時々使っていた抹茶茶碗を写した1枚。



小津が描いた素描画

## 佐々部清監督（その2）

西松優 スタッフ

― 佐々部清監督に感謝を込めて ―

シネマ游人十号で、昨年三月に六十二歳で亡くなられた佐々部清監督の生き方と主要映画作品の概略を紹介させていただいたところ、もう少し作品について詳しく知りたいというお話をいただいた。私としては多くの方に佐々部清監督の存在と作品を知っていただきたいと思ったので、大変ありがたい気持ちで今回追加し書かせていただくことにした。

まずは、佐々部清監督（以下、佐々部）の映画作品の特徴からご紹介したい。

### 佐々部映画の特徴

一つ目の特徴は「家族」のつながりや絆を描くことを重視していることである。

彼の映画の主人公の多くは普通の人たち、いわば庶民である。こうした人たちが悩みやハンディを抱え、試行錯誤しながら頑張って一歩踏み出す姿を描くのである。そしてそれを支えるのは家族であり、夫婦であり、時には友人・

知人たちだ。佐々部は額に汗して働く人たちが報われるべきだと考え、彼らにスポットを当てているのである。青春や戦争がテーマであった場合でも、背景には家族の存在を映し出す。

佐々部は、世の中で地道に一生懸命働く家族を持った普通の人たちに元気になってもらいたいと同時に、家族の大切さをもう一度考えてほしいと考えている。佐々部は自分が結婚し妻、子供ができ家族への責任と愛着を感じると共に親の死によって家族の大切さが身に沁みた。それに加え、自分が関わった家族をテーマにした有名なテレビドラマが地味な内容でも人の心に感動を与えうることを実感し、家族の絆を描く映画をライフワークにしたのである。また、俳優高倉健との出会いの中で「何を撮るかではなく、何のために撮るかだ」とアドバイスされ、映画の中で家族の大切さと共に言いたい主張をわかりやすく伝えようと考えたと思われる。

しかし、こうした種類の映画は、映画評論の世界では概して評価が低く、興行面では観客の中心となる若者が好まないため大手映画会社は手を出しにくい。こうしたことから、この分野を描く映画監督はあまりにも少ない。こうした不利な状況の中で、佐々部は信念を持って戦ってきたの

である。

二つ目の特徴は映画が非常にわかりやすいことである。

佐々部の映画はどれを観ても非常にわかりやすい。映画は「エンターテインメント」、「大衆娯楽」であるという信念を持ち、多くの人に観てわかってもらいたいと思いついて作っているのである。しかし彼の映画は単にわかりやすいだけではない。例えば感動的な映画の場合、大音量の音楽で盛り上げ泣きの演技をするケースも多いが、佐々部はそんな撮り方はしない。構成、画面に映るものすべてを重視した構図、カット挿入の方法などを考え尽し、巧みに伏線を張りながら積み上げて知らず知らずのうちに感動に導いていく。そして上手く間（ま）をとるので、観客の想像力が働き、より感動が深まっていく。そして余韻が残る。これは彼の映画を意識して見れば理解いただけれると思う。

佐々部は「映画の職人」と呼ばれたいと言っていたが、その実力をもつ。「匠」と言い直してもよいだろう。その実力は下積み時代の努力の蓄積の結果である。横浜放送映画専門学校（現・日本映画大学）で学んだ映画理論・知識に加え、長いフリーの助監督時代にコツコツ脚本を書き脚本力を磨き、多くの監督の下で映画技法、撮影方法、哲学等をどん欲に学び、映画現場の隅から隅まで知り尽くし、

映画に関わる下積みの人たちの苦労も熟知している。この職人的な技能をフルに駆使し自分のテーマである「家族の大切さ」を訴えていくのである。

### 佐々部映画の分類

佐々部の映画は、大きく前半（二〇一一年）と後半（二〇二〇年）に分かれている。前半の十一本は比較的多く大手映画会社で撮っており、メディアの露出度も大きく作品が正當に評価され日本アカデミー賞、日本映画監督協会新人賞など多くの賞を受賞している。

プロの映画評論家はアウトローや少数者、人の悪意や心の闇、芸術的なものに注目しがちで、佐々部のような善良な普通の人たちを描く映画には冷たいが、それでも『チルソクの夏』『夕風の街 桜の国』などはキネマ旬報ベストテンに入っている。一方映画好きの一般人が選ぶキネマ旬報読者のベストテンでは、『半落ち』『チルソクの夏』『カーテシコール』『夕風の街 桜の国』『ツレがうつになりまして。』の五本、つまりこの間に作った映画の半分がランクインしているのである。家族を描く佐々部映画への一般観客の支持の強さがわかる。

しかし後半になると、佐々部の家族の絆を描く映画が大

手映画会社では作れなくなる。そこで、佐々部は自分の意に沿わない映画を大手映画会社で撮るのではなく、自分の撮りたい映画を、地方に活路を求め地方とタイアップしながら地方発の映画作りをしていく。予算も撮影日数も以前の何分の一と厳しいが、自分の信念である家族の絆の映画を撮ることを優先するのである。時には映画を実現させるために、自ら先頭に立ち地域で制作資金集めを行ったり、ホテルと宿泊費値引き交渉、車の利用交渉等を行ったりすることもあった。

後半八本の内五本が地方発映画で、『六月燈の三姉妹』『群青色の、とおり道』『種まく旅人 夢のつぎ木』『八重子のハミング』『大綱引の恋』がある。地方発映画というものは、多くが「町起こし映画」で地域の観光・産業PRに注がれる内容は今一つのもが多いが、佐々部の映画はテーマである家族の絆がメインで語られその背景に地域の風景や住む人々の姿が映し出される形をとっており映画の完成度は高い。

しかし、残念だが後半の映画は、大手映画会社・配給会社絡んでおらず上映劇場数が少ないため、露出度が低くベストテンに入っていない。

## 主要作品の紹介

佐々部が十九年で作った映画は十九本にのぼる。ここでは五本の作品を紹介させていただくが、年代のバランスなども考え、受賞したりベストテン入りして有名な『チルソクの夏』『半落ち』『カーテンコール』『ツレがうつになりまして。』は外し、地方発映画を二本入れた。

### 『陽はまた昇る』(二〇〇二年公開)

この作品は実話を題材に、ビクター開発部門の加賀美(西田敏行)が赤字事業部の事業部長に左遷させられ、世界規格となるVHS(家庭用ビデオ)を開発し成功するまでを描く。しかし、企業の英雄成功譚ではない。佐々部らしく多くの事業部員、いわば市井の人たちが逆境の中で力を合わせ、夢を実現していく姿を感動的に描くのである。佐々部が描きたかったのは、夢を持つこと、人との信頼、家族の大切さではなかったか。

加賀美は人を“財産”と考え、二百人以上の全部員の名前を覚え接していく。反発していた部下・大久保(渡辺謙)が加賀美の“夢”と“人間力”に次第に心酔していく姿は、部員たち全体の気持ちの変化を代表する。佐々部は、加賀美の姿を撮る時には背景に工場内できびきび働く

部員たちを画面に映し出したり、何度も暑い中を技術者たちが苦勞しながら慣れない営業に飛び回る場面を見せ、皆の努力を意識させる。家電各社の他社ビデオ方式採用の流れの中で絶体絶命に陥り、大久保の知恵で松下電器の松下幸之助相談役の出社を待ち伏せ、VHS採用進言を試みる。夜の東名を大阪に向かう車の中での二人の心の通い合う会話と到着の頃昇る朝陽は心に残る素晴らしいシーンだ。

そして、ラストに病妻介護で会社を去る加賀美とその家族の前に広がる部員たちの“VHS”の人文字と笑顔は感動的である。それは部員たちとの関係や、部員たちの活躍を劇中しっかりと描き切っているからである。

初監督とは思えない見事な出来栄で、実力が認められこの後多くの映画を作っていくことになった。

### 『夕風の街 桜の国』(二〇〇七年公開)

この映画は“若い二人の女性”、被爆者の伯母とその姪の異なる時代の物語である。

前半は、皆美(麻生久美子)が主人公で、被爆後広島で貧しくも明るく健気に働いているが、十三年後に突然原爆症を発症し、恋人と弟・旭に見守られながら二十代で死ん

でいく。皆美が恋人に、心のため込んできた被爆死者への罪悪感、原爆への恨みと生きたいという思いを堰を切ったように語るシーンは切なく哀しい。麻生久美子の好演が光る。佐々部は終始抑えたタッチだが、逆に不条理な皆美の死の悲しみが浮き立ってくる。

後半はその五十年後、皆美の姪の七波(田中麗奈)は、その父・旭(堺正章)、弟と東京に住んでいる。父の挙動不審から広島までその後を追う。そこで父の家族が被爆で亡くなり自分が被爆二世であることや伯母皆美の若い死を知り、皆美の青春、父・旭と被爆者の母との出会いや二人が愛をはぐくむ姿、原爆症での母の死を思い浮べる。そして愛されて生まれてきた自分と生の大切さに気づき、かけがえのない命を強く生きていこうと誓う。“過去”と“現在”の交錯をオーバーラップで見事に表現し、限りなく感動的な場面に仕上げている。

この映画は原爆で家族を破壊され、生き残った旭が新たに幸福な家族を作り、妻を原爆症で亡くしながらも頑張り子どもたちに次の時代を託していく映画でもある。亡くなった皆美の髪留めは、七波の祖母(＝皆美の母)↓七波の母↓七波の父・旭↓七波と手渡されていく。それは“命のバトン”だ。家族の愛や繋がりを際立たせた佐々部の映画



史に残る傑作だ。

### 『三本木農業高校、馬術部』（二〇〇八年公開）

この作品は実話に基づく農業高校を舞台にした青春ドラマの佳作である。

元大学馬術競技の女王馬だったコスモは眼病で引退し三本木農業高校馬術部に引き取られているが、気性が荒い上に目が見えず心を閉ざしたままだ。香苗（長淵文音）が部顧問古賀（柳葉敏郎）の指示で世話係となり、三年間献身的に尽くし、コスモの心が次第に開いていく。古賀や部員たちに励まされ、香苗は盲目のコスモと馬術大会でついに障害物を跳び越えた。

この映画は、青森の四季の中で寮生活、農業実習風景、手間のかかる馬の世話、乗馬練習など部員たちの日常生活、香苗のコスモの世話や悩む様子をじっくりと丁寧に映し出し印象づける。一方、実際の高校使用、馬術部での実地訓練、吹き替えなしの乗馬など「本物」指向である。そのため、大会で障害物を跳ぶシーンは、目の見えないコスモと「コスモの目」になろうとする香苗の心が通じ合った人馬一体の迫力で、観る側は強く心を揺さぶられる。

卒業式が終わり、香苗は厩舎で担当者掲示板の自分の名

前を後輩の名前に書き替えコスモに別れを告げ去って行く。するとコスモが大きくいななき、「ありがとう」と言っているように胸を打たれる。また、障害物を飛び越えたシーン、ラストの厩舎を去る香苗の後ろ姿のストップモーションは豊かな感動と大きな余韻を残す。

佐々部は盲目の馬と少女の心温まる話に終わらせず、人と人の絆の大切さ、高校部員たちの成長や背後の家族の姿もしっかり描いている。

### 『六月燈の三姉妹』（二〇一四年公開）

この映画は鹿児島島の六月燈夏祭りを背景に、商店街の和菓子屋家族の悩みとそれを解決する姿を心やさしく包み込むように描くハートウォーミングな地方発のホームドラマの佳作である。

離婚した長女静江（吉田羊）と父・母が営む和菓子屋は赤字続き、次女奈美江（吹石一恵）は離婚調停で帰省中、三女栄（徳永エリ）は職場不倫と、家族がそれぞれ悩みを抱えている。新商品の和菓子で店は売上が増え、長女は婚活、次女は夫の誠意にほだされ元の鞆に収まり、三女は不倫をやめ店の後継ぎになるという型どおりの結末だが、なぜか心がホッコリするのである。

それは脚本と佐々部の演出のうまさからだろう。この作品は離婚から入っていつて結婚とは何かを考えさせる。そして一度解体しかけた家族が、互いの思いやりにより家族の存在の大切さに気づくのである。佐々部の演出で、三姉妹俳優の個性と役のキャラクターがベストマッチとなり、喧嘩をしても心の通い合う姉妹の雰囲気うまく醸し出している。三女が家を飛び出し、それを長女、次女が追い川べりを歩きながら次第に互いの身の上話しをする場面は、打ち解けた感じがよく出ている。また祭りの舞台で三姉妹が演ずるキャンデーズの歌と踊りは絶品だ。佐々部は意図して劇的な起伏をつけず、小さなカット、画面に入れる風景・小道具、構成等細かな所まで気を配り伏線をさりげなく張りながらヤマ場に向かって積み重ねていく。そのため観客は無意識の内に感動に導かれるのである。まさに映画の職人である。

### 『八重子のハミング』（二〇一七年）

これは介護保険制度のない時代に、元教師の石崎（升毅）が四度のガン手術を受けながらも、アルツハイマー病の元教師の妻八重子（高橋洋子）を十二年間家族の支援を得て介護した夫婦の純愛物語である。佐々部は原作の手記を読

み感動し、プロデューサーを担当し自らも資金集めを行い、脚本を書き監督した。

この物語では八重子が発症し徐々に記憶をなくしてゆく様子と、石崎一人から始め、娘夫婦と同居し家族全員や地域の友人たちの協力を得て介護してゆく姿が描かれる。

劇中、八重子の幼児のような純な可愛らしさと石崎のずつと変わらぬ愛情を上手く漂わせ、二人の固い絆を浮かび上がらせていく。それは優れた脚本のお陰だ。石崎の講演会を映す中で、時代に沿って夫婦のエピソードが回想として語られ、石崎の想いが短歌に託して画面に映し出される。そして回想の中の思い出として若い頃教育に情熱を注ぎ込んだ八重子の姿を映し、当時との違いを鮮明にする。また母、娘、孫などの家族の挿話では家族の協力とその有り難さを強く印象づける。それを支えるのは夫婦役俳優二人の卓越した演技だ。特に、妻の病状の進行に応じた高橋洋子のリアルな演技は素晴らしい。女優魂が見えた。

ラストは二人の思い出の場所から一転して街全体を映し出し、「いい日旅立ち」の歌とクレジットが始まる。八重子の死の悲しみもあるが、一人で精一杯生き「いい日旅立ち」できた安堵感が伝わってくる。佐々部の「夫婦」「家族」の絆とその大切さを伝えたいという気持ちが滲み出て

いる映画である。

以上、五本の作品を代表として紹介させていただいた。

なおここで紹介していないが、『カーテンコール』は佐々部版『ニュー・シネマ・パラダイス』、『ゾウを撫でる』は佐々部版『映画より愛を込めて』である。

佐々部清監督の生き方（シネマ游人十号参照）を省みてみると、「信念と行動の人」という言葉が一番似合っている気がする。また、チャップリンの名言に「人生に必要なものはそれは勇気と想像力、そして少しのお金だ。」という言葉があるが、佐々部清監督はその言葉通りに人生を駆け抜けたのではないだろうか。

佐々部清監督の残した映画作品十九本のうち、公開済の十八本はDVD化されているので、是非読者の皆さんに観ていただければ幸いです。遺作の『大綱引の恋』は、昨年十月に地元鹿児島で先行公開され、今年五月全国公開である。

この十一号が刊行されるのは、佐々部清監督の一周忌を終えた頃だろう。佐々部清監督のご冥福をお祈りする。

## 佐々部清監督映画作品一覧

全国公開年月／作品名／ビデオ会社 ▲佐々部監督脚本執筆

- ◎キネマ旬報ベストテン ○キネマ旬報読者のベストテン ◇地方発映画
- |         |               |                |
|---------|---------------|----------------|
| 2002・6  | 陽はまた昇る ▲      | 東映ビデオ          |
| 2004・1  | 半落ち ▲○        | 東映ビデオ          |
| 2004・4  | チルソクの夏 ▲◎○    | 角川エンターテインメント   |
| 2005・6  | 四日間の奇跡        | 東映ビデオ          |
| 2005・11 | カーテンコール ▲○    | バップ            |
| 2006・9  | 出口のない海        | ポニーキャニオン       |
| 2007・7  | 夕風の街 桜の国 ▲◎○  | 東北新社           |
| 2008・2  | 結婚しようよ ▲      | ポニーキャニオン       |
| 2008・10 | 三本木農業高校、馬術部 ▲ | 東映ビデオ          |
| 2011・8  | 日輪の遺産         | 角川書店           |
| 2011・10 | ツレがうつになりまして。  | ○ キングレコード      |
| 2014・2  | 東京難民          | キングレコード        |
| 2014・5  | 六月燈の三姉妹 ◇     | オデッサ・エンタテインメント |
| 2015・7  | 群青色の、とおり道 ▲◇  | クリーク・アンド・リバー社  |
| 2016・11 | 種まく旅人 夢のつぎ木 ◇ | TCエンタテインメント    |
| 2017・1  | ゾウを撫でる        | ギャガ            |
| 2017・5  | 八重子のハミング ▲◇   | ギャガ            |
| 2019・1  | この道           | TCエンタテインメント    |
| 2021・5  | 大綱引の恋 ◇       |                |

※参考文献

キネマ旬報2020・6下旬号

各年キネマ旬報2月下旬ベストテン号